

「論語と算盤」の思想は ロハスに通じる

いまに通じる栄一の言葉

私は渋沢栄一の長男の次男の長男の長男、つまり栄一から数えて五代目、玄孫にあたります。もつとも渋沢一族であることを意識したこともない。昔はほとんどありませんでした。幼稚園か小学校に上がったばかりの頃、友達に「うちのおじいちゃん、教科書に出ているよ」と言ったら、「さ、さ、さ」と言われて終わり。先祖に偉い人がいたということはほんやりとはわかって、それ以上でもそれ以下でもなかった。しかも小学校三年生のときに、アメリカに渡り、大学を卒業するまですごしましたから、渋沢栄一はますます遠い存在でした。

その後私は、ファースト・ボストン、J.P.モルガン、ゴールドマン・サックスと外資の金融機関を渡り歩



しばさわ・けん 1961年3月生まれ。小学2年生で米国へ渡り、そのまま中・高を過ごしテキサス大学へ。その後UCLAでMBAを取得、ファースト・ボストン、J.P.モルガン、ゴールドマン・サックスを経て、ムーア・キャピタル・マネジメントへ。東京駐在事務所設置、日本代表を4年間務め、2001年に独立を果たす。

き、一九九六年にヘッジファンド大手のムーア・キャピタル・マネジメントに転職、翌年、同社東京駐在事務所を設置し代表に就任していま。日本ではハゲタカファンドと悪名が先行するヘッジファンドですが、私は日本人として初めて、ヘッジファンドの日本事務所代表となつ

たのです。渋沢栄一は家訓で投機を禁じていました。にもかかわらず私は投機集団の代表になったのですから、ご先祖様はお怒りかもしれません。この話については後ほど触れるとして、二〇〇一年に私は独立、シフサワ・アンド・カンパニーを設立しています。

実はこのときまで、渋沢栄一についてにはよく知らなかった。もちろん日本産業界の大立者であり、生涯に五〇〇の会社をつくったという一般的な話は知っていたものの、それとまりにすぎませんでした。ただ自分で会社をつくるにあたり、五〇〇もつくった先達に学ぶべきことはないかと、初めて栄一の残した言葉と向き合ったのです。中身を読んで驚いた。栄一が亡くなってからすでに七〇年が過ぎていたにもかかわらず、現代に通用する言葉がたくさんあったからです。

渋沢栄一は、産業を興す一方で、利益と倫理の両立を唱え、その規範を論語に求めています。そのうえで、「最近の日本人は元気がなくなつた。その日その日をすこせればいいと考える人ばかり」などという言葉を遺している。栄一は、勇気を持ってリスクをマネジメントすることで自分の未来を切り拓いていった。ところが、晩年になると、世の中が守りに入ってきたと嘆いている。実は、これはいまの日本と同じです。この言葉を遺したのは、明治維新から五〇〜六〇年ぐらい。つまり維新後を戦後に置き換えれば、それがそのまま使えてしまう。渋沢栄一が危惧したように、日本はその後、暗黒の時代を迎えます。ということ、いまの世の中も、このままでいくと再びそ

んな時代を迎えてしまう。そうならないために、栄一の言葉をいまに伝える必要がある、と考えるようになったのです。そこで独立した二〇〇一年に「洪沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶ」という本を発売、さらにはウエブ上で、「洪沢栄一の『論語と算盤』を今、考える」と題したブログを始めました。このブログはすでに一年半にわたって続いており、近々、これをベースとした洪沢論語の本が出る予定です。

ヘッジファンドと家訓

洪沢栄一は、別に特別なことを言っているわけではない。「正しく生きましよう」という当たり前のことを言っているにすぎません。考えてみれば、自由主義経済の原点ともいえるべき「国富論」を書いたアダム・スミスも、道徳哲

学者でした。つまり栄一にしてもアダム・スミスにしても、道徳があったその自由経済だったのです。では、洪沢栄一の「論語と算盤」の思想をひとりで表すとうなるのかということ、「口



利益と倫理の両立を唱えた洪沢栄一。

ハス（L.O.H.A.S.）ではないかと最近考えるようになりました。ロハスとは、「健康で持続可能なライフスタイル」ですが、これは事業活動にも当てはまるのではないかと。栄一の言葉に次のものがあります。「およそ事業は、社会の多数を益するものでなくてはならない。その経営者一人がいかにか大富豪になっても、そのために社会の多数が、貧困に陥るようなことでは、正常な事業とは言われぬ。その人もまたついにその幸福を永続することができない」

またこうも言っています。「その富の作り上げる根源は何かというと、仁義道徳、正しい道理の富でなければその富は永続することができない。論語と算盤という懸け離れたものを一致させることが、今日改めて大切な勤めである」

振り返って、ホリエモンや村上フ

ファンドについて考えてみると、村上フンダさんは「会社は株主のもの」と主張していました。洪沢栄一も、「重役は株主の言うことを聞きなさい。その信頼を失ったらその座から去るべき」と言っています。考え方が極めて近いことがわかるでしょう。堀江貴文さんにしても、リスクを取ってチャレンジしようという考え方は、栄一の思想そのものです。ではどこが違ったかという点、永続性ではないかと思えます。短期的な利益を遡う、あるいは自分たちだけの富を追求する。これは永続性とは相容れませんが、だからこそ彼らは、志半ばで挫折したのではないかと。つまりロハスの思想が彼らにはなかった。そう思えてなりません。

では私自身はどうかという点、先ほど述べたように、洪沢栄一は家訓で投機を禁じてきました。しかし私は外資系ヘッジファンドの日本代表にはなつたといつても、その家訓は破っていないと考えています。これは、「洪沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶ」にも書いたことですが、栄一は近代産業を育成するため、株式制度を世にひろめました。そのときに、身内が株の売買で儲けるようでは、出資してくれた人たちに申し訳ないと考えたためです。いまは当時とは状況が違います。それが一点。

もう一つ、都合のいい解釈かもしれませんが、洪沢栄一はリスク・マネジメントのプロでした。状況に応じて、攻めと守りを自在に操っていたのです。そして現代社会において、リスク・マネジメントの実践例として最適なのが、ヘッジファンドの人たちです。その意味で私は、栄一の精神を受け継いでいる。我田引水的ではありませんが、そう考えています。そのうえで最近、こんなことを考えています。金融というのは合理的な世界です。そこでは機械論が幅を利かせています。A社とB社が合併すれば、異なる得意分野がシナジーを生み、これだけの合併効果が出る。A+B=Cという考えです。しかしそれとは異なる考えとして生命論があります。パーツの組み合わせではなく、ものごと全体の流れを重視するものです。A社とB社が合併しても、同じ生気が流れなければマイナスになることもある。これまでは機械論が盛だったのが、それに限界があることもわかり始めた。生命論を考えていくと、さまざまな矛盾がある、しかしそこに創造の可能性があらことに気が付きます。

私自身としてもこれからは、お金儲けと社会貢献の融合を目指しながら、その出会いによってできる空間の可能性を信じてビジネスを進めていきたいと考えています。

B